

第6回 アポロン神の震災対策 - 古代社会を運命づけたデルフォイ神託

地中海をとりまく古代社会において占いは国事だった。戦争や植民活動の政治判断を下さねばならないとき、統治者は義務として神託を伺わねばならなかった。神託所はギリシア世界の各地にあったが、もっとも有名なデルフォイの神託所は前8世紀頃にできたらしい。



デルフォイの神託所跡 (1994年スケッチ)

デルフォイはコリント湾に面してそびえるパルナッソス山の中腹にあり、階段状の斜面に神託諸施設が築かれていた。アポロン神殿や献納物をおさめる宝物庫だけでなく、ストア、屋外劇場や競技場などを備える都市だった。前5世紀のペルシャ戦争に際して下した託宣により、アテネの指導者テミстокレスが海軍を増強し、サラミスの海戦で大軍相手に勝利を収めた話はよく知られている。デルフォイのアポロンはギリシアの海外植民活動にとって守護神だった。古代に1000近くも存在したポリスは、このギリシア全体の共有地に自分専用の区画を確保するとともに、ギリシア諸都市という「けんか好きな家族」(P.Cartledgeの表現)のなかでの自己像を宣伝することを目的に宝物庫を建立していた。

占いは「不可知なるものへの超自然的な知識」だといわれ、宗教性がその本質である。ヘロドトスの「歴史」を拾い読みするだけで、古代社会において神託が占めていた位置がわかる。ラーゲルクヴィスト(スウェーデン人のノーベル賞作家1891-1974)は「巫女」というデルフォイを扱った小説のなかで、巫女の神がかり的状态を迫真の表現力で描いた。これを読めば神託とはどういうものだったのか、宗教に無縁の人間にもいっくらか理解できる。

デルフォイではオリュンピアに約200年遅れて(前582年より)、4年ごとの競技際が開催された。地中海沿岸のあらゆる地方から、特に競技祭に合わせて、巡礼者たちがやってくる。当然各地域の政治的情報もこの地に集まった。この地はギリシア世界の覇権を狙うポリスが奪い合うほどの一大情報センターだったのだ。そのデルフォイ自体も幾度か大地震や侵略に見舞われて、神殿の倒壊と再建を繰り返した。すぐ南のコリント湾はエーゲ海プレートとユーラシアプレートとの境界にあたる。はじめは山小屋風の木造家屋だったアポロン神殿は前548年に焼失し、アテナイ名門の一族が隣保同盟から請け負って立派な石造建築に建て替え

た。この頃はアテナイが積極的に海外植民活動を行い、デルフォイ神託には多くの恩恵をこうむっていたのだろう。しかし前373年に地震で倒壊した後は再建に40年ほどかかっている。ペロポネソス戦争後におけるギリシア世界の混乱、北から迫るマケドニアの圧力が再建工事に影を落としていたのだろうか。



デルフォイ神託所跡から南東方向を望む（1994年撮影）

前四世紀半ば以降、ギリシア世界がマケドニア（アレクサンドロス大王）の軍門に降ったが、神託所はマケドニアの保護下にあった。やがて北方からガリア人の侵入が多くなり、しばしば宝物が略奪された。しかし前279年、たまたま起こった地震のために狭い斜路から多勢で攻撃するケルト族も退却を余儀なくされたという。パウサニアス「ギリシア案内記」によれば、「厳しい霜、霜に加えて吹雪まで起こり、さらには滑り出したパルナッソス山の巨岩や打ち砕かれた崖縁が異民族軍をえじぎにした」（フォキス第23章）。アポロン神の宿る地は地震も味方につけるほどの神域だったのか。それとも神と自然に逆らわない都市計画が、戦争や地震・津波にも強い特性を持つことを、ギリシア人たちは知っていたのだろうか。

デルフォイの中心をなすアポロン神殿の入り口には、3つの格言が刻まれていた。「汝自身を知れ」「過ぎたるは及ばざるがごとし」「さわらぬ神にたたりなし」と。これらの格言は戦争と震災への心構え、つまり対処法ともとれるのである。紀元二世紀前後に「対比列伝（英雄伝）」や「倫理論集」を著したプルタルコスはその晩年デルフォイの神官を務めたという。ローマ時代にも神託は継続していたのだ。紀元後の六世紀頃にキリスト教の隆盛によって見捨てられるまでデルフォイ神託は1000年以上にわたって存続した。そして神託そのものがなくなっても、アポロン神の格言は現代に生き続けている。

（参考図書）

- R.フラスリエール（戸張智雄訳）「ギリシアの神託」（白水社）1963年
- ヘロドトス（青木巖訳）「歴史」（新潮社）1968年
- パウサニアス（馬場恵二訳）「ギリシア案内記（上）（下）」（岩波文庫）1992年
- P.ラーゲルクヴィスト（山下康文訳）「巫女」（岩波文庫）2002年
- P.Cartledge “ Ancient Greece “（Oxford University Press）2011年